

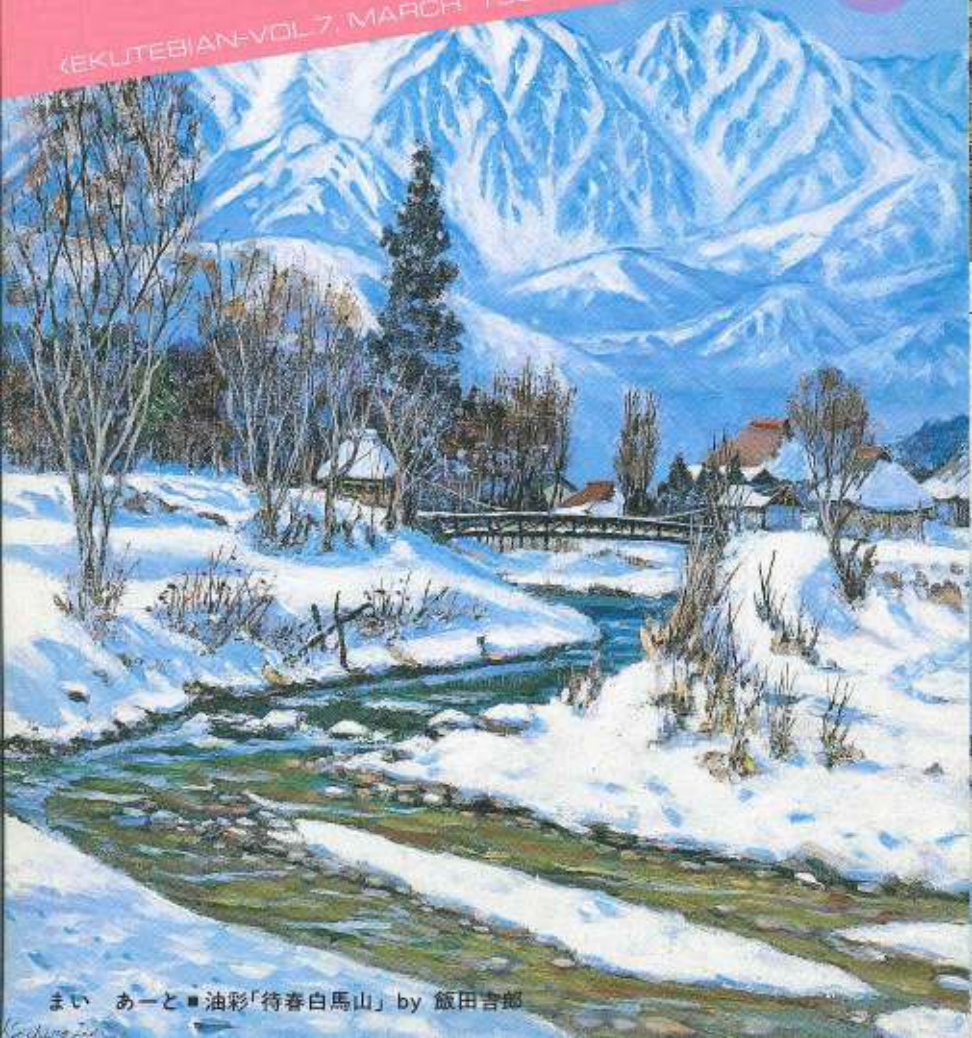
月刊

立川と語ろう 立川に生きよう

えくてびあん

3

《EKUTEBIAN-VOL.7, MARCH, 1990-EKUTEBIAN》



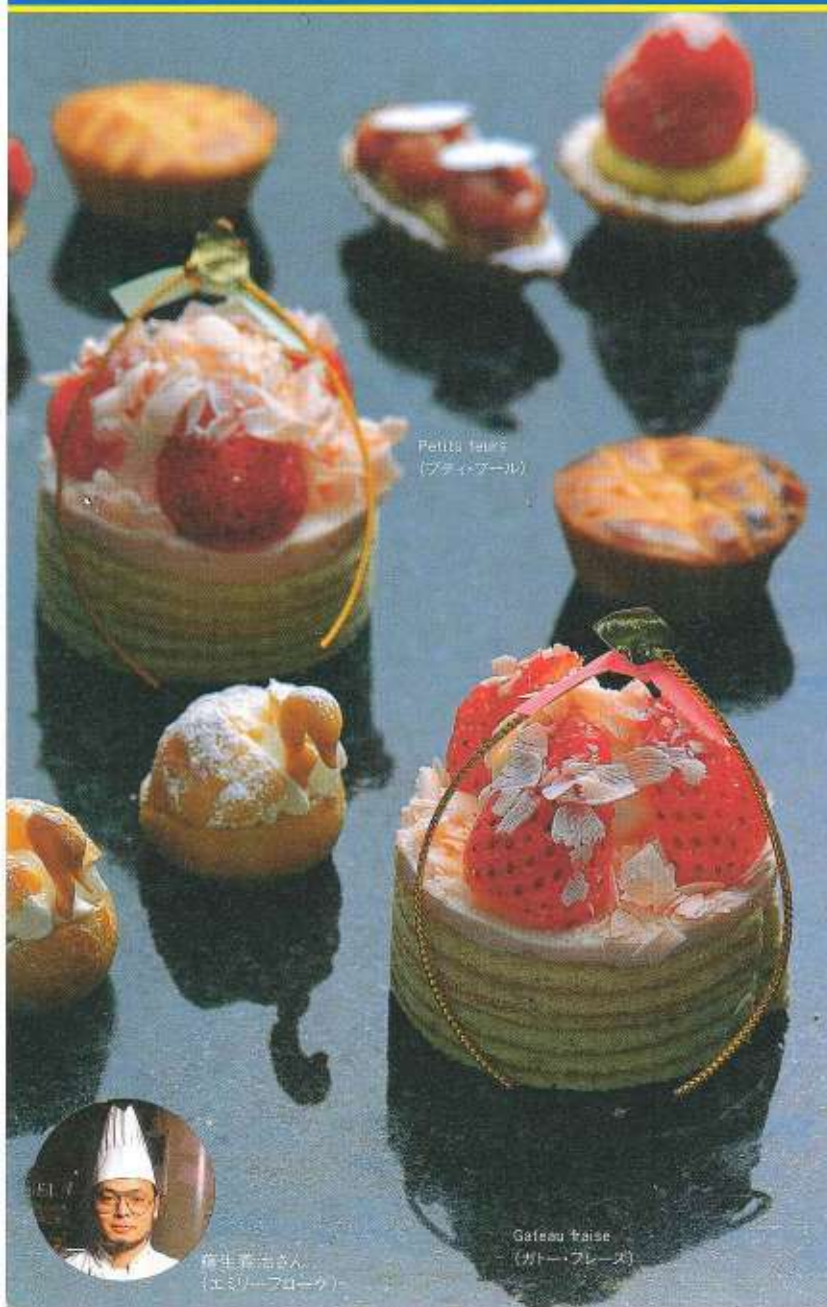
まい あーと ■ 油彩「待春白馬山」by 飯田吉郎

あ
の
子
の
七
ツ
の

お
祝
い
に

春いちばんの、うれしい行事といえ
ば、やはり「雛まつり」でしょう。
春は名のみ、まだ霜がおりている時
分から、お母さんは今年のお祝いにつ
いて気をもんでるものです。

日本料理を片山真理子さん、ヨーロッパ
風味のお菓子でのお祝いを藤生義治さん
に作っていただきました。ご賞味くだ
さい。



Petit pain
(プチ・パン)

Gâteau raise
(ガトー・レーズ)



藤生義治さん
(エミリー・ブローネ)



いちこのプランタニエ

はしりと加賀ぶの吸い物

三色おひねり揚げ

幸の花とカゴのひなはしり

雛まつりデコレーションすし



片山真理子さん
(片山料理教室)

外国語 春の風



習えば嬉し

レストラン「シエ・タスケ」(曙町2丁目)の料理人、塩野象司さんは「アカデミック・イスパニスタ」(柴崎町3丁目)「桜庭雅子さん主宰」でスペイン語を習って一年になる。「フランス料理はわがまま、完成された料理。その技術をしっかりと身につけた上で、地方料理としてのスペイン料理をやりたい」といっています。そう遠くないユメを語りはじめた。

スペインには「パル」(パル)とよばれる店がたくさんある。そう、フランスのピストロと云ったらいいだろうか。素材を生かした料理法とお客さんのコミニケーションを密にした店をもちたい。これが塩野さんのユメで、ユメをこめて、土地、風土、料理と確実に歩を進めている。

曙2丁目にはもう古くから住んでいます。もう一つ私には故郷があります。生れ故郷が。大正7年で1926年にインドネシアで生を受けました。13歳の時に日本に戻ってきました。それからインドネシアには行くこともなかったのですが、S60年に一度、S61年一度とその後毎年のように足を運ぶようになって、目的は生れた場所を訪ねてみようと思つて、インドネシア語も少々話せますが、やはり使い易い英語をと思ひ鍛錬しています。あちらでは英語を学校で学びますから、とても便利なんです。2年前にも行きましたが住んでいたあたりの地名も変り、領事館にも手掛かりがなく、今年もまた、夢を探しに行こうと思つています。



宮城さん



塩野さん

留学をして、日本にいてはわからない日本のことを学びたい、知りたい、という気持ちと、色々な国々の人が持っている文化を自分の目で確かめたいと思つています。できればアメリカオレゴン州のリンフィールドカレッジに行きたいと願つて一生懸命やっています。一刻一刻変わるアメリカ、言葉の状況なども英会話を習っているUSA英会話学院(柴崎町3丁目)で教えていただき、身近なものとしています。留学へのオモイは何かと考えるんですけど、小さい頃アメリカカンスタールで英語を習い、中学の時にホームステイをしたこと、心に抱いていたせいかと思つていましたが、やっぱり海外に仕事で行つてた父親を見ていた影響かな。

御園さん 仕事の関係でよく東南アジアに行く機会があります。テクニカルアドバイザーという立場から機械の説明をしなければならず、多少でも自ら英語を使つて通訳のかたの負担にならないようにしたいし、技術者の端くれとして自分の口から自社の製品を説明出来ないなんてつまらないじゃないかと、3年前からワールド英会話(一番町2丁目)さんに習い始めました。話せるのこそそうでないのとは、例えば税関でちょっとトラブルでも話せると物事が意外にスムーズにクリアしちゃうんです。現地の方にも信頼が厚くなりますしね、会話の足りない部分は、手や身体を使ってアクションを混ぜながら話すことと相手の心に通じるようですね。

表紙は語る

「ぼちぼちと絵を描き始めて25年。立川美術会に仲間入りをして、世話役をながく勤め気が付いてみると16年の歳月があつたというまにたつていたという飯田吉郎さん(幸町5丁目)。会になくはならない人である。今回の作品は、白馬にて描かれたもの。「ながい間描いていますから、あつちこつちに民俗オナーの知り合いがいて、いい時季になると電話を下さるんです。この絵も、雪の少なかった昨年1月のころのもので、雪が降つたよと、いつもの連絡が入つて早々に身支度をして描きにいった時のものです。」



飯田吉郎「待春白馬山」



えくてびあん エアメールボックス



偶然のことからここアフリカはケニアのナイロビを旅行する機会に恵まれました。友だちの一人が音楽の先生をしていて、ある年にインスブルグで開かれた音楽祭でケニアの合唱団の歌に感動し、その中の一人、ローズさんという方

漢字テスト

空欄に一字挿入を試みよう。
同 ● 異 夢
三 拝 ● 拝

●3月10・11日●
立川市地域文化会
フェスティバル
場所/ウイル9Fウイルホール
※詳しくは ☎22773

乗りにくいようやくナイロビへ。30時間、長い旅でした。でも、思い切つてアフリカまで来てよかったのです。アンボセリ公園やマサ

リ。ライオンが獲物を食べている時は一頭が見張りをしている。動物を威嚇しています。遠くでハイエナがねらっています。そのまた

動物の毎日です。また、ある日は気球に乗り大アフリカを一望。またある日はキラマンジャロの夕陽に感動。ローズさんですが、こもる歓待

「低山」に人気
「多摩の低山」の著者で知られる守屋龍男先生(立川二中教頭)が、1月28日滝の上会館で講演。集まった「低山ファン」を喜ばせた。山、高さがゆえに草からずの所以を、ご自身の体験とスライドを駆使しながら、2時間近い長講で力説、会場を熱くした。

多摩の一寒村に過ぎなかつた立川ですが、今や三多摩の中心として目をみはるばかりの発展ぶり。街の景観も年々変貌をとりつつあります。さて、その立川に昔、「山の小学校」と呼ばれていた学校がありました。今からはとても想像もつかないことですが、それはどこかの学校でしょうか。わかるかな?

立川市立第九小学校(曙町2丁目)
②市立第二小学校(曙町3丁目)
③市立松中小学校(一番町5丁目)(2月号の答) 大正の中頃
立川の街をバスが走りはじめたのは関東大震災以後と言われています。当時、現在の立川郵便局の裏あたりにあった「東盛舎牧場」の経営で、一台きりの幌馬車のようなバスが立川と横田間を40銭の運賃でトコトコと走っていたそうです。

月刊「えくてびあん」第68号
平成二年三月一日発行
発行所 えくてびあん編集工房
東京都立川市富士見町2-20-15
〒190-0151
電話 ☎0425-501-1100
編集人 立井啓介
発行人 沖野嘉男
印刷所 株式会社 印刷所 株式会社

立川クイズ

昭和六年に「ミス・ビートル号」が青森県の三沢を飛立ってアメリカのワシントン州ウエナッチまで史上初の太平洋無着陸横断飛行に成功したことはよく知られています。ミス・ビートル号が立川飛行場に機体整備のため立ち寄っていたことはあまり知られていません。その時に飛行士を励まそうと少年がリンゴを五つ差入れたそうです。その御礼にウエナッチ市からデリシヤスの苗木が三沢市に贈られ、これが機縁となつて日本がリンゴ王国になったといわれています。三田鶴吉さんが、このことを長く市民に伝えられたらと青森のリンゴ試験場から「孫木」を贈ってもらい市内の公園に植えられました。●えくてびあん 薄き光の すみれかな

多摩最大の店舗網
暮らしやサービスに合わせ、幅広い幅で
みなさんにお役に立ちます。
多摩のマイバンク
住しん
多摩中央信用金庫
本店 〒190 立川市曙町2-8-28
☎(0425) 26-1111 (代)

真如苑だより
春になりました。幾たびか、この街を白く染めた今年の冬でしたが、それだけに春の訪れが待ちどおしい日々でした。こころあたたかのために、真如苑の門をくぐって見ませんか。早春の爽やかな午後をお過ごしになりませんか。
日時 3月15日(木) 午後2時~4時

工房から
昭和六年に「ミス・ビートル号」が青森県の三沢を飛立ってアメリカのワシントン州ウエナッチまで史上初の太平洋無着陸横断飛行に成功したことはよく知られています。ミス・ビートル号が立川飛行場に機体整備のため立ち寄っていたことはあまり知られていません。その時に飛行士を励まそうと少年がリンゴを五つ差入れたそうです。その御礼にウエナッチ市からデリシヤスの苗木が三沢市に贈られ、これが機縁となつて日本がリンゴ王国になったといわれています。三田鶴吉さんが、このことを長く市民に伝えられたらと青森のリンゴ試験場から「孫木」を贈ってもらい市内の公園に植えられました。●えくてびあん 薄き光の すみれかな

春になりまして。幾たびか、この街を白く染めた今年の冬でしたが、それだけに春の訪れが待ちどおしい日々でした。こころあたたかのために、真如苑の門をくぐって見ませんか。早春の爽やかな午後をお過ごしになりませんか。
日時 3月15日(木) 午後2時~4時

春になりまして。幾たびか、この街を白く染めた今年の冬でしたが、それだけに春の訪れが待ちどおしい日々でした。こころあたたかのために、真如苑の門をくぐって見ませんか。早春の爽やかな午後をお過ごしになりませんか。
日時 3月15日(木) 午後2時~4時

第9回

我家は3代目

老舗といい暖簾の重みという。それも3代つづけば語り尽くせない物語がある。この街にも沈黙して静かなる物語のかずかずがそこに隠されている。

創業の志に輝く多摩辨の味



明治35年、創業。末年、90周年を迎える老舗。初代・久之助、二代目・富雄の志をついで三代目、正久さんが幸いる「中村亭」の弁当は手づくりの味で知られる。特に名物「多摩辨」は、定評あるコンテストで幕の内部門「日本一」に輝いたことも。立川駅にまだ急行が止まらない頃から築いた味の評価は、今日ゆるぎない。

中村亭(柴崎町2丁目)

立川駅に根づいて、立川人に愛好されてきた中村亭。

ひと口に「手作りの味」といっても、作業の積重ねは大変なもの。



初代/中村久之助さん 二代/中村富雄さん

弁当・仕出しをやる前は、日野の渡しそばで茶店をやっていたという。その場から数えるとう三代目になるが、近代化されてきた経営の中にも、創業の精神とぬくもりある味加減は絶やしたくないと56人の社員たちと励む中村正久さん。